次第に周封建制の問題、漢帝國の構造の問題に擴大されたものと思われるから、そこに禮制の實體や郡縣制の本質を理解する場合において特色ある立場が生れて來るわけであるが、しかしそれはまた、特別問題史的に視野を擴大してゆくことを主眼とするのではない。どちらかといえば、それは古典と古典世界の中に一歩一歩と踏み込む事自體を好む氏獨自の研究態度のなせるわざでもあるのであろう。こうした意味からいつても、周代から秦漢時代にわたる、國家・社會に關して提出されつゝある、政治史や社會史の面からの華やかな論爭に對し、氏の納得する古典世界の理解の方法が、今後どのように對應してゆくものであるか、私はその研究の展開に對し、多大の興味を寄せているものである。

（東京、吉川弘文館、昭和三五年五月、本文三三〇頁、圖版八頁）

曹操論集

―曹操論爭よりみた中國「中世」史の理論―

好並隆司

I

近來、中國の史學界に於ける最大の論爭は三國魏の曹操評價問題であろう。これは千篇に達する論文と評論を生み出し、專攻の學者個人のみならず、學生を含めた協同討論會が天津、山東、四川、廣東などの大學で組織されているといつた盛況であつた。

又、論爭の契機が郭沫若の創作戯曲「蔡文姫」であつたことから、史學界のみならず、藝術文學畑に迄論議が波及していつたことは論爭に更にはなやかな色どりを添えたのである。しかも、論點が複雜多岐にわたつて、討論參加者が混亂を起す心配のある時には、新聞・雜誌が適宜、道標の役割を果し、各論者の視角を紹介した。この樣に見れば、曹操論爭は中國各界を動員しての一大カンパニアであつて、まさに社會主義的綜合力を發揮したできごとであつたと評してよいだろう。

所で、この論爭の背景には極めて大きな思想斗爭が含まれ、政治的な問題が介在していると思われる。先づ、その事情について概略ふれておこう。新中國が解放以來、八年間に、ブルジョア思想の批判、反右派斗爭はほゞ所期の目的を達したが、なお一部の知識人には革命の實踐を避けて、古代史研究に名をかり、中國の建設をサボタージュする分子が存在するという痛烈な批判が中共中央宣傳部の陳伯達から問題にされた。これが五八年三月上旬のことであり、彼の報告をきつかけに〝厚今薄古〟の必要性が問題となり、歷史の研究の大勢が、五四運動以後の近代史重點という風に理解されたのである。これ以後、中國史學界は急激な左翼偏向を生じ、問題提起者の陳伯達自身「紅旗」13でこの傾向を批判して〝厚今薄古〟とは歷史知識を現實に生かすことに他ならぬと述べた。かような狀況の展開から、こゝに〝薄古〟の意味が問われなければならなかつたのである。郭沫若の問題提起は右派史學への批判も含めながら、左翼偏向の傾向について批判の主な視點

をおいたようであつて、その好材料として曹操をとりあげ、廣汎な論爭をひらく端緒を把んだことは、その結果の如何をとわず、政治的にタイムリーであつたことは誰しも否定するわけにはゆかないであろう。このような政治的配慮の如何をとわず、題目の普遍性と對象となつた漢末社會の複雜さはそれ自體としての興味ももりたてゝ、討論の內容は深化されると同時に擴大していつた。この結果、討論參加者各自が歷史の複雜さと、その中をつらぬく法則性についての理解を自覺するにあずかつて力があつたと思われ、これは中國史學界にとつて大きな收獲であつたと言わねばなるまい。一九六〇年一月發刊の「曹操論集」はこの論爭に於ける主要論文をまとめたものである。これをいとぐちとして、曹操論爭で展開された主な爭點についてふれ、中國に於ける前近代史研究の理論的現狀を紹介したい。

II

曹操論爭に於ける各論者の焦點は、民族・階級問題及び歷史發展の擔い手の問題の二點であつて、この把握は現代的課題でもあり現代中國史學者の意識がうかゞわれて興味が深い。さて直ちに本論に入ると、郭沫若の所論は、黃巾起義の目的が生活安定と食料の確保にあつたと考える。これは曹操が黃巾の目的を繼承して完成したという彼の主要な論點につながるため、重要な前提をなしている。卽ち、支配層が階級を越えて進步的な役割りを果しうるという理論的立場である。これは當然、階級斗爭中心の立場から多くの批判を受けた。まず各論者に見られる前提は曹操が封建統治者であるという階級的立場の確認である。曹操は反動地主集團の代表で黃巾の目的を繼承するはずがないと考える楊柄、孫次舟らの形式的な批判意見もあらわれたが、論爭の主流は支配階級を二つの階層に區分することによつて展開して行つた。卽ち、强宗地主、中小地主、及び農民という三區分であり、中小地主を代表しているのが曹操だという見解である。この考えはほゞすべての論者に受入れられており、游紹尹、吳澤、束世徵、袁良義、何茲全らの如く、世族地主と非世族地主、或は寒門地主、世族地主というように區別している人々もあるが內容は全く同一のものを指している。こうして曹操が中小地主の代表者ということになると、一面で强宗地主を打擊しながら農民に讓步し、他面、農民に打擊をあたえて地主階級の利益を守るという二面性が說明できるのである。このような視角を設定すれば郭沫若の提起の難點と考えられる、階級の違う者へのバトンの繼承は可能となるとみたのであろう。然らば、曹操には繼承できる面と不可能な反面とがみられるはずであるが、そのどちらを强く評價するかという事は黃巾再編後の曹操の政策——特に屯田に關する見解が決め手になつてくる。吳晗によると、屯田は食糧が蓄積され、農民はその仕事に滿足しているとのべて郭說に全面的に贊意を表する。驃其讓は生產の恢復と發展に屯田は有效であるが、高度の搾取があつて人民に不利であるとし、柳春藩は逆に屯田が人民の負擔を輕くしたと評價している。また尙鉞の如く、屯田は搾取率が高く、軍制下で自由を制限されたが、屯田客は一應生活の保證をうけているの

で進歩的な意味を持ちうるなどの評價があり、必ずしもどちらか一方に截斷されてしまうわけではないが、要は屯田が人民にとつて有利か、不利かが大きな決め手となつている。從つて、階級的視點が是非の判斷に大きく影響していることがわかる。只、屯田の搾取率の多少、屯田客の自由の程度などの論議は、戎笙によると、漢代の實質の貢納分は $\frac{50}{100}$ 乃至 $\frac{60}{100}$ であり、屯田もほゞ同樣と考えて居り、農民の緊縛程度も、豪族に對する依付と屯田客の國家に對する依付との比較となつて、比較そのものが困難になつている。

そこで論爭は再び黃巾起義の目的は郭沫若の指摘の如く、生活安定と食糧確保にあつたかどうかに戻ることになる。先づ、式毅、廖德清らは黃巾軍は〝耕者有其田〟の如く、土地を所有する事を目標として居り、單に生活安定と食糧を求めたのではないと主張し、曹操はその意味で、黃巾の運動を繼承したものとは言い得ないという論を主張して、土地所有要求說を提起する。これに對して郭沫若は〝中國農民起義の歷史的發展〟という論文を人民日報に揭載して、當時の農民が土地を所有すると言う事まで目標としていたということは、現在の標準を以て歷史的な事實を評價する基準にしているための誤りであると述べ、赤眉の起義以來、黃巢に至る迄は土地所有を要求する事は農民のスローガンに入つていないので、彼等はたゞ物質的生活の保障を求めただけであつたと舊說を再確認した。袁良義は黃巾起義の目的は小農平均主義であると「太平經」卷67を引いて述べ、財の均分もスローガンとして出されているが、これは當時にあつては空想的で、實現不可能なスローガンであつたと判斷している。そしてこれらの目標はいづれも達成できなかつたが、客觀的には舊社會の生產關係を破壞したことが大きな意味を持つとしている。この說はスローガンの認定に於いて郭說と異るが、曹操は黃巾の破壞の後に新しい生產關係をきづいたとし、繼承說をこのみで否定してはいない。更に、楊寬の說に據ると、黃巾は宗教組織によつて蜂起したが、その目的は自らの政權を樹立して、貧困と逃亡の狀態をなくすることにあつたが、當時の歷史段階から實現不可能で、空想的社會主義に終つたのであると言う。かように土地所有の問題が出されながらも、黃巾のスローガンに土地所有要求の有無を檢證するに止り、基本的な生產關係の檢討に至らず、起義目的の認定に終つている。以上の討論では大勢として、郭沫若の論旨に打擊をあたえるものはなく、農民の起義に空想的ではあるが、理想はあつたのだという結論で滿足しているようである。

さて、繼承問題はなお討議すべき點を殘した。それは郭沫若の說で、黃巾軍は曹操によつて青州軍に編成され、曹操の北支統一を助けたから、曹操の政策の中には黃巾の意志が入つていると言うのである。羅耀九の意見は、青州兵は降つても獨自な態度をとつていたし、各豪族に利用された場合でも黃巾は變質していないというのであり、逆に、吳澤は青州軍になつた時、すでに封建軍に轉化していると解するので、郭沫若の見解は左右双方から批判されることになつた。吳說は多くの論者に共通で、袁良義も青州

兵を封建軍とみているが、曹操との關係については起義の初期は社會の主要矛盾は農民對地主で、その際に於ける曹操の立場は後者にあつて、不名譽な役割を果したと言うべきだが、青州兵として編成されて以後は地主内部の鬪爭が主要矛盾となつて、青州兵はこの統一と平和恢復のために、曹操の重要な權力となつた事は積極的に評價してよいとする。こゝに當時の歷史の段階を二つに分けて、起義の組織の存在する時期と豪族に吸收されてからの時期とにする考え方が提出された。これは曹操が徐州その他で多くの敵人を殺傷したという非難を擁護する意味も持ち、地主内部の爭いが主要矛盾になつた限りでは、統一のための戰爭は正當化されるからである。この統一戰爭は結局、農民の生活を安定させるわけであるから、正當性を持つという論理が、こゝにみられ、一九五八年中共が當面していた金門、馬祖、及び臺灣の解放を前提としての現代的感覺がこゝにも導入されていることが看取できる。從つて人民と支配階級という截斷が郭沫若に對しての批判者の内にみられたが、基本的には郭氏に同意する側の學者にもこのような現代的基準が混入されていることは注意しておかなくてはならないだらろ。

さてこゝで問題にされた主要矛盾の轉回であるが、この變化を認める場合は當然、時代區分の議論が出てきてよいはずであるがあまり活潑でない。中國の時代區分論の大勢は漢代封建制說で、奴隷制と考えるのは中共になつてからは、王思治らの〝兩漢社會性質問題に關する探討〟（歷史研究一九五五、一）に始めてあらわれるのである。この說は次第に有力になりつゝあり、封建社會說に影響をあたえて、漢末を早期封建制→封建制の轉回點と考える論者を生んだ。從つて曹操論爭が社會の矛盾の論議に至つて、この區分論が行間にうかゞい知られ論證に微妙なニュアンスを織りなしている。

田余慶によると、秦漢統一後は專制主義的中央集權的封建制であるという毛澤東の意見をとつて、漢末、封建割據が濃厚に生じ、曹操の統一は中原のみに終つたと言つていながら、その時代の歷史的使命を充分果したと評しているから、秦漢のみならず、三國迄この毛澤東の規定を延長しているものと思われる。尙鉞の說は西漢→東漢の時代の主要矛盾は農民と地主の間に存在し、土地兼併・奴婢の豪族による占有・流民の增加などが社會問題となつたが、これは製鐵技術の向上によつて農具の質がよくなり、生產力に寄與することが大きかつたこと、牛耕が普遍化してきたこと、流通經濟の發展してきたこと、などによると指摘し、曹操の時代は奴隷制的色彩の濃い東漢朝がくずれて新しい生產關係が生れようとしていたと考えている。漢代の主要矛盾を地主と農民の對立と考えながら、東漢を奴隷制的社會というのは解し兼ねるが、小農（西漢）→奴隷（東漢）→農奴（曹魏屯田）と考えているものとみられる。從つて、曹操設立の屯田は軍制下にあつて苛酷な搾取を行う機構を持つが、屯田客はともかく保證された生活をしていたので進步的役割を果したとのべて、曹操に肯定的評價をあたえている。周一良の意見は、秦と西漢の社會はマルクスの言う樣に土地

の私的所有の缺如を認めてよいが、東漢では封建的土地所有が深化しているとし、曹操はこれに對して中央集權化を志向し、一般民衆の封建的隷屬に對して保護を加える役割を果したが、社會の大勢としては封建化が深化していると述べる。そして曹操の事業は隋朝にいたつて完成するべきもので十全を期しがたいことは歴史の必然であり、曹操の評價は統一事業にのみ置かるべきだと言う。

漆俠によれば、秦漢以來、土地の兼併は激烈でこれを抑える限田法が提起されているが、この趣旨を生かしたものが曹操の屯田である。これは封建的土地所有と並存しうるので、小農民の保護を行つて矛盾を緩和する機能を果したと言う。その際、小農民の破産の理由として、國家の徭役の面を取上げているが、それは典農部民が徭役がなかつたことと對比せしめられているので、この方面の討論から時代區分論に迄發展することは全く望めない狀況の樣に思われる。袁良義によると、漢末三國は奴隷制の殘存している早期封建段階から封建制への過渡期で、自由な小農民は地主の佃農となる傾向が主流であつたとする。そして黄巾は奴隷を所有していた豪强地主を滅亡せしめ、强宗地主は農奴關係を發展させ、一方では專制主義國家が小農民と屯田客を作り出してゆく狀況もみられるとする。更に何茲全は漢末を奴隷制から封建制への展開であると、新しい見解を支持している。

以上の樣に各論者には多少の差異がみられるが、基本的に奴隷制→封建制への移行と三國時代を考える論者は、曹操を進歩主義者とみる點でほゞ一致しており、封建制もしくはその變容と考える論者にあつては、屯田が農民にとつて有利か不利かという基準で曹操の評價を肯定的、又は否定的に見ているのである。

Ⅲ

郭沫若說の、曹操が黄巾の目的を繼承したという點は以上の如く相當の反響を呼んで論爭の中心となつたが、曹操民族英雄說もかなり多くの論者によつて批判の對象となつた。郭氏の提案というのは、烏桓という異民族の侵入を防ぎ、中國の統一を保持したのは曹操の功績であるという趣旨のものであつたが、それには驃其讓、鄭天挺らの贊成を得る一方、方明、木羽、長弓、吳澤らの反對があつたが、後者の論が有力であつた。方明、木羽は、曹操の烏桓征伐が袁紹一門の討滅に付隨しておこつた事件にすぎないと述べ、吳澤は烏桓に就いての專論を發表して、この民族は漢民族の盛衰と共に苦樂を分けあつた邊境の部族で、敵對の狀勢は、漢中期以後より認められない。そして當時、中國の主要矛盾は割據か、統一か、であつて民族的矛盾は從屬的なものであるとして郭說を否定する立場に贊成した。

さて、曹操は史料からみると、〝用人唯才、不問門族〟と言われる樣に人材登用に特徴がある。この問題に就いて、朱永嘉・田余慶に依れば、才能だけで人材を擧げ浮華交會の徒を排したのは曹操の法術主義によるものだと言う。卽ち、才能を擧げるのは申商のイデオロギーを曹操が持つていたからであると判斷し、信賞必罰を基本にしていることを擧げる。しかし、德行という標準を否定しないことも注目し、この兩方の基準を使い分けすることが

曹操自體の矛盾であるとする。周一良はこの不仁不孝であつても能力ある人材を擧げるのは法家思想でなく、道家思想だと注目される意見をのべているが理由は擧げていない。吳澤によると、この才人の登用は寒門地主の地盤を確立することだと言い、尙鉞によるとこれを九品中正法の前驅をなすと解し、何茲全によると、單に豪强に打擊をあたえるだけで、九品中正法の如く豪族に妥協する一面は持たないと連續を否定した。

更に、曹操は羅貫中の三國志演義によつて普遍的な人物となり、京劇にとり入れられて惡役の代表となり、歷史的事實よりも劇中の曹操が一般の固定觀念となつたのであるが、郭沫若の名譽恢復論によつて、惡役のよつて來るゆえんも檢討されることになつた。

東世澂によると、曹操への惡評は支配階級より出ており、南宋以前には褒貶半ばしていたが、以後、漢王朝を正統と考える封建觀念によつて固定してしまつたとする。王昆會は、安史の亂以後、四川に逃亡した愛國の詩人達が諸葛亮を賞揚し、宋代燕雲十六州の陷落によつて、華北が異民族の統治に歸して以來、曹操は舞臺上で惡役が固定し、これが歷史上の曹操と考えられるようになつたと說く。また劉知漸の意見は、北宋迄は正統主義の立場から蜀を寇賊としていたが、金元時代、華北が異民族の支配に入ると、漢朝を尊び、曹操を抑える思想がおこつた。これはいづれも封建的な正統論であつて反動的ではあるが、尊漢抑曹思想は民族主義の立場から一般の民衆の愛國感情に適合して曹操の惡役が定つたという趣旨であつた。

Ⅳ

以上曹操論爭の展開が各方面にわたつていることの一端を紹介してきたが、論爭の中核は階級斗爭と民族問題及び歷史發展の擔い手の問題として要約できるように思われる。こうしたテーマの追究は歷史學の本質にかゝわる問題とみられ、從來の日本に於ける歷史學の試みとしての〝國民のための歷史學〟運動が政治への學問的反省に乏しく挫折の余儀なきにいたつたのと對比して、社會構造の違いばかりで計れない學問の本質把握の相違を感ずるのであるが、曹操論爭をふり返つて、これが効果的な結論に達しただらうかと考えるとこれは意外にも否定的な感想を持たざるを得ない。上述紹介から、その點について觸れてみたい。先づ、繼承問題については、楊柄、孫次舟、范文瀾、劉亦冰らの如く、中小地主層概念を導入せず、地主對農民の對立こそ基本的であると考える論者は黃巾敗北の結果生れた屯田民は搾取多く、人身的に緊縛されて農民にとつて苛酷であつたとみた。從つて曹操は地主代表であつて肯定評價はできないとする。一方この立場から屯田を有利だと判斷する人は、黃巾斗爭の結果、地主層が農民に妥協したのだとする。これらはいづれも、屯田の搾取度を漢代と比較する所に骨子がある。その基準は、租の收獲に對する比率であつて、この際は漢代小農民を論議對象としており、人身緊縛の程度及び法によつて決められていない搾取を言う場合は豪族に依付する農民を對象にして議論している。卽ち、漢代の本質を示す國家

と小農民と、地主と小作人、この双方の生産關係を混同して問題にし、計量しているにすぎない。このようにみれば地主對農民の關係を本質的と前提して論をすゝめ、小農民を規定せず導入している點に大きな弱點がある。さてこの二階級の對立だけでは史料の複雜さに對して余りにも形式的な結論しかでないので、この克服のため考えられたのは、基本的生産關係への反省でなくて、新しい階層概念の導入であつた。即ち、中小地主規定である。この層は言う迄もなく、地主階級であつて、農民との對立が基本的であるが、同じ階級内では豪族（强宗）との間に矛盾を含むものであつた。從つて中小地主層が進歩的役割を果すか否かは、その時期の主要矛盾は何かということの檢討結果に俟つことになる。地主對農民の矛盾が、豪强地主對中小地主の局面に移つているから中小地主層に進歩性があると言うわけである。しかし地主農民の關係は生産關係であり、豪强地主對中小地主の對抗は同一階級内の斗爭で、いわば政治概念である。こゝには階級斗爭を形式的に理解するため、對抗關係が豪强地主對中小地主に移つた時、却つて、階級斗爭の不在が生じた。勿論、概念のスリカエが行われているのは明らかである。世族對寒門の對立は階級斗爭の上での官僚組織の組かえと理解しなくてはならないものであつた。

さて、漢末を奴隷制から農奴制に轉換する時代と考える論者は曹操が地主層の代表と考えてもうまく進歩的な意味を見出すことができた。只この場合、奴隷制というのは漢代の奴婢が支配的な直接生産者であつたというもので、史料のうちから奴婢利用の部分を量的に示すのであつて、奴隷的生産關係があるか否かは全く問題にされていない。然らば漢代小農民の存在をどの樣にみているのか問題になるが、漢代奴隷制說がこの論爭で重要な部分を占めていないのでこゝではこれだけに止めておく。

民族問題に就いて概括してふれておけば、郭沫若の提起も現代の中國がおかれている民族主義の强調から大きく影響をうけている樣に思える。民族の概念はレーニン・スターリンの定義を持ち出す迄もなく、近代的な意味で用いられなくてはならない。前近代的ないみでの〝民族〟はそれ相當の前提的考察が必要であろう。然も、階級斗爭を緩和するものとして〝民族〟概念を提出したのは、形式的な階級斗爭論に打擊をあたえるためであつたとは言え、誤りの上に屋を架すことになつたようであつて、論爭は〝民族〟と階級の間で混迷している感じが深い。いづれの概念も中國の現實で生きて働いているため、客觀視が困難であり、主體的な歴史觀が、論爭の中で未成熟の理論のまゝに結論をいそがせたという苦い皮肉を感じさせられるのは筆者のみであらうか。選擧問題に就いては日本の〝故吏〟論爭につながる面があつて特に論評したい點であるが既述の如く、稍形式的な論議の上に推論されているので興味に乏しい。別の機會があれば改めて考えてみたいと思う。

以上であたえられた紙數もつきたので論爭の意義を評したい。すでに述べた樣に郭沫若の提起はそれが高い政治性を含むものであつたが故に、眞の意味の歴史學的性格を持つ論爭となつた事は

く評價さるべきだと思うし、このことに大きな場をあたえた中國の社會のありかたに深い羨望を禁じ得ないが、結果は我々にとつてやゝ失望の感があることは否定できない。これは史的唯物論の教條主義的理解に問題の本質があるのではなかろうか。しかし、中國の建設の狀況をみるとき、本質的な判斷のない百花齊放はブルジョア自由主義を生み出し民族の行く手を誤るものとなろう。この意味での階級斗爭の强調はそれがやゝ形式的に走るとは言え、我々にない特徵を示し、我々の史學の方法について反省をうながす面も輕視できない。筆者は日中兩史學界の交流と論爭が新しい歷史學の發展を生み出すものと思うが、その日が一日も早いことを期待して紹介を終えることにしたい。

（生活・讀書・新知三聯書店刊、一九六〇年、四四〇頁、論文目錄七頁）

江西省輕工業廳陶瓷研究所編

景德鎭陶瓷史稿

佐久間重男

最近、中國の工藝史上傳統ある陶瓷器についての概說書、研究書ならびに圖錄などが本場の中國でかなり相ついで刊行されるに至つたが、[1]それらの中で本書は質と量ともに類書に見られぬ充實さを示し、また學術的にも充分答えうるものとして注目される。本書は發刊の序文を載せていないが、表題に示す如く江西省景德鎭市の陶瓷研究所における共同研究の成果と見られ、既成の研究成果を綜合的に集大成しながら獨自の見解をも加えた景德鎭の陶瓷業に關する通史である。とくに最近の中國における社會經濟史的分野の研究成果をも多く取り入れ、從來の內外における陶瓷史研究には全然問題にされないかもしくは殆んど輕視されていた陶瓷生產の社會的背景、言い換えればその社會的生產關係の面をもかなり重視していることは、本書の特色と云えるであろう。[2]

さて本書の構成としては、緒論を含めて四編からなり、それに一三〇個にわたる主として單色の圖版が挿入されている。第一編の「緒論」（三～四〇頁）は、第一章で、まず中國における陶瓷器の發明ならびに陶器から瓷器への移行段階を說明し、第二章で、景德鎭の歷史およびその地理的條件と陶瓷業との關係に言及する。第二編は「封建時代の景德鎭の陶瓷工業」（四三～二五五頁）として、第一章に景德鎭の陶瓷工業の起源およびその發展を述べて、漢から宋元までの時期を取り扱い、第二章を景德鎭陶瓷業內の資本主義萌芽として、一四世紀から一八世紀にいたる明淸の時期の陶瓷業に見られる生產力の發展と生產關係、官窯・民窯瓷器の樣式と技術的進步、瓷器の國內外市場への發展、景德鎭の都市經濟的專門化と市民階級の成長およびその反封建鬪爭などに言及し、全編中最も豐富な內容を含んでいる。第三編は「半植民地半封建社會下の景德鎭瓷業」（二五九～三四六頁）で、第一章にアヘン戰爭以後の中國の社會經濟的變化が景德鎭瓷業に及ぼせる影響を述べ、第二章に資本主義的工場制手工場による瓷業生產の情況、第